

巻頭インタビュー

【トップの目線】

大昭工業(株) (愛知県名古屋市)

代表取締役 木村 諭 意智

ビル・飲食系、水廻りから固形廃棄物まで 中間処理開始し、小口まで営業広げる



いつかはやってみたかった

■廃棄物処理事業には今や、大手メーカーなどをはじめ様々な企業が参入しています。世の中も変わりました。

木村 当社は1965年(昭和40年)の創業で、発足

以来、浄化槽維持管理や受水層・高架水槽の清掃、下水管清掃、配水管清掃、地下槽、グリストラップ、プールの清掃などいわゆる「水廻り」の事業を中心に手がけてきました。

■現在は処理業を手がけている企業も多いですが、ただ、「水廻り」の事業と「廃棄物」の事業は全くの異業種とも言えますね。

木村 グリストラップ汚泥なども廃棄物ですが、一般的な固形物などの廃棄物処理事業については1995年に名古屋市の事業系一般廃棄物収集運搬業の許可を取得して本格的に始めました。その意味では、比較的新しい廃棄物処理企業ですね。

異業種と言えばそうなんです、そのお客様は実は同じなんです。提供するサービスはいずれも、衛生管理、美化、事業で発生した不要物の適正処理です。ですから、先代の社長もいわゆる廃

棄物処理事業に参入した訳ですが、その実務に全く経験がありませんでした。排出事業者と委託契約書を交わし、マニフェスト伝票を発行するなどということは浄化槽の事業ではなかったことでした。「いつか



飛鳥グリーンキャンパスの内部

はやってみたかった」と意を決して新規事業に乗り出したのだそうです。

■廃棄物処理企業としても若いということですが、社長もまだお若いし、スタイリッシュですよ。

木村 そうですか(笑)。先代の社長が創業した会社でして、私が入社したのは1998年になります。最初は清掃などの現場から入って、その後は営業で飛び回りました。そして、2004年には社長に就任しました。もう、いきなりでした。

昔から仕事に携わっているベテラン社員の方々とどう付き合っていけばよいのか、大変難しかったですね。

サービス向上と 小口顧客層開拓へ

■社長として、まず心がけたのはどのようなことだったんですか。

木村 先代の社長もそう考えたと思いますが、水廻りと廃棄物処理でお客様から一括してお仕事を任せてもらおう、そのためにはもっと廃棄物処理にも力を入れようということでした。

実は、名古屋市には浄化槽やグリストラップなどの清掃・汚泥回収の事業と、固形廃棄物処理の事業を両方手がけているところは少ないんですよ。お客様との結びつきを強くするためには「廃棄物処理は馴れないから、やらない」では済まなかったのです。

■廃棄物収集運搬事業からも地歩を固めたと。

木村 従来のお客様に加えて、さらに広い分野のお客様を広げられると考えました。当社は、廃棄物処理業としては後発になりますから、水廻りのお客様からの廃棄物のお仕事とともに、小口のビルや店舗のお客様を開拓しつつ、大手のお客様からも入札案件ではないスポットものに対応できる足回りの良さを活かそうと思いました。

■さらに、今回、中間処理事業にも乗り出した訳ですが。

木村 廃棄物収集運搬事業にも馴れ、お客様との結びつきも強くなりました。

その中で近年、民間ベースの処理を進める名古屋市の施策を積極的に受けとめるとともに、中間処理まで任せたいという排出事業者からの要望もあり、自社で収集運搬している廃棄物をメインに減量、資源化を進め、コスト削減と顧客層拡大のために中間

処理を行うことにしたのです。

フル稼働に向けて頑張ります！

■しかし、このような世界的な景気低迷の時期に設備投資を行うというのは勇気が要ったのではないですか。

木村 中間処理をやるうというのも、先代の社長の計画にありましたが、ビジョンとタイミングがなかなか合いませんでした。ですから、なぜ今というのではなく、ようやくその条件が整ったということです。景気低迷までは予想しませんでした(苦笑)。

■今回の設備の内容はまさに、社長が狙っていることを体言したものになってますね。

木村 中間処理工場は「飛鳥グリーンキャンパス」(愛知県飛鳥町)というネーミングで、RPF製造(1日あたり処理能力2.79t)と廃プラ類の圧縮(同1.39t)、金属くずの圧縮(同2.16t)、蛍光管の破碎(同

2.742t)、発泡スチロール減容固化(同0.189t)、廃プラなど固形廃棄物の選別を行うことができます。「選別・リサイクル」をメインにした施設です。さらに、本社付近には汚泥の積替え保管施設も備えています。

■ここからが、またスタートですね。

木村 あくまで収集運搬がメインであることには変わりはありませんが、お客様の様々な要望に応えられるようになりましたし、小口の顧客にも質の高いサービスを提供できると思います。車両も施設もフル稼働に向けて頑張りますよ。

CO₂対策にもいち早く着手しました。本社事務所とバキューム車・廃棄物収集運搬車の他、社員の通勤、社長の出張まで、事業に係るあらゆる段階のCO₂排出量を算出し、その全量をカーボンオフセットしたのですが、「歩けということでしょうか」などという声もあがりました。まあ、笑い話ですが。SNV



上:飛鳥グリーンキャンパス
下:RPF製造施設